

「附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト」

調査研究報告書

附属図書館増築・改修基本構想

平成 17 年 5 月

山梨大学附属図書館

はじめに

大学の附属図書館は、いま大きな転機を迎えつつある。ネットで容易に検索できる時代になり、学生は図書館を利用しなくても、さしあたり必要な情報を獲得できるようになった。電子図書館の構築が叫ばれて久しいが、大学の法人化にともない図書館予算はいっそう厳しくなったから、電子図書館の縮小は教員の研究生命を危うくする。学生は図書館から離れ、教員は危機意識を募る。こうした状況は、大学の附属図書館に図書館が今後どうあるべきかを真剣に討議することを要請しているのである。

山梨大学の附属図書館もその例外ではない。むしろ、それ以上に問題を抱えているといったらよい。2つの大学が統合し、附属図書館も統合したが、各学部の図書館に対する認識にはまだ隔たりがある。この隔たりは、少しでも埋める努力をしなければならない。また、附属図書館は中期目標・計画のトップの項目に「図書館資料の集中的管理を行う」を掲げた。山梨大学は、とくに旧山梨大学の附属図書館は図書相互利用、有効活用に程遠い状況が続いている。これらをなんとか打開しなくてはならない。これがこのプロジェクトを企画する動機であった。プロジェクトには、幸いに、大学内外から幅広く意見を聴くことができた。学生にも協力委員として、日頃図書館について考えている思いの丈を語っていただいた。これほど図書館のあるべき姿について議論したことは附属図書館の歴史の上ではじめてのことではないかと思う。こうして出来上がった基本構想は、新しい図書館作りのためのコンセプトを集約したものである。このコンセプトはたんなる理想論ではなく、今後の附属図書館が進むべき進路を描いてある。それは本学の附属図書館にとって貴重な財産になりうるものだと思う。

附属図書館の増築・改修事業は、簡単に実現できる生やさしいものだとはいえない。しかしどんなに難しい事業でも、計画なくして実現なしである。計画をじっくり仕上げれば、いつかは実現できる日も来ると信じている。このプロジェクトが実現に向けての突破口になれば、幸いである。

約1年に及ぶプロジェクトの成果がこうした報告書の形でまとめることができたのは、ひとえに学外委員、学内委員および学生協力委員の方々がかつ刺激的な討論をしてくださったおかげである。図書館を代表して感謝申し上げます。また、このプロジェクトの立ち上げにあたって格別のご配慮をいただいた前学長、現学長、両理事、会議の事務いっさいを取り仕切ってくれた図書館職員の各位に対してもお礼を申し上げます。

平成 17 年 5 月

山梨大学附属図書館長

大友 敏 明

目 次

附属図書館の増築・改修の基本構想	1
1 基本理念	
2 附属図書館の保有すべき機能	
(1) 図書館資料の保存機能：図書館資料の集中管理	
(2) 電子図書館的機能：図書館資料の「占有から共同利用」への方針転換	
(3) 教育支援機能：大学教育研究開発センターとの連携	
(4) 情報発信機能	
(5) コンサルティング機能	
(6) 広報機能：開かれた図書館	
(7) 滞在型図書館の創設	
施設改善の基本構想	4
1 基本理念	
2 具体的な改善事項	
(1) フロアプラン	
(2) 館内空間	
(3) インテリジェント機能	
附属資料	
「附属図書館の将来設計」策定までの経緯	8
研究分担者個別報告要旨	9
研究分担者個別報告配布資料	12
研究分担者名簿	27

附属図書館の増築・改修の基本構想

1 基本理念

新しい附属図書館の基本理念は、「大学のなかで学生の「広場」となる空間の創造」とする。

利用者が来館したくなる知の集積空間、情報の空間、創造的空間、癒しの空間、文化交流の空間からなる知の創造活動の拠点となる大学附属図書館を目指す。図書館は、大学の中心であり、誰もが立ち寄ることのできる「広場」があり、書物や人との出会いや知の創造活動のできる多様な機能をもつ「広場」からなる図書館を目指す。

附属図書館は平成14年10月、旧山梨大学と旧山梨医科大学との統合によって誕生したが、附属図書館に対する教員の認識には、いまなお温度差がある。それは統合以前の両附属図書館の予算規模、外国雑誌の経費負担状況および図書館資料の集中管理状態を見れば一見して明らかである。両大学が統合し、附属図書館も統合した現在、新たなコンセプトのもとで附属図書館は再構築される必要がある。そのためには、附属図書館が大学の知の創造活動の中心であることをあらためて確認する必要がある。附属図書館は、学術情報の基盤的機能（収集・保存・提供）の学内唯一の組織であるとともに、大学の教育・研究支援および文化交流の中軸的役割を果たす責務を担っている。こうしたことをまず確認するのは、旧山梨大学においては学内における附属図書館の位置づけが相対的に低かったからにはほかならない。このことを確認した上で、現在大学附属図書館をめぐる社会的環境が大きく変化していることにも注目しなければならない。情報化、電子化に加えて、大学の法人化によって従来以上に効率性や学生サービスが求められていることを重視する必要がある。附属図書館の機能は、今後学生サービス中心の学習図書館と研究者支援のための電子図書館に分化していくことが予想される。そうした状況をふまえて、電子図書館としての機能はこれまで以上に充実させながら、新附属図書館の基本理念は「大学の中で学生の「広場」となる空間の創造」とし、新しいタイプの学習図書館を目指すこととする。静寂な空間のなかでの学習環境を保証することはいうまでもないが、多くの学生が不断に立ち寄り、知の創造活動を実現できる多様な機能をもつ「広場」を提供することこそ新しい附属図書館の大きな役割であると考えられる。

2 附属図書館の保有すべき機能

(1) 図書館資料の保存機能：図書館資料の集中管理

図書館資料の集中管理を促進し、資料の有効活用、相互利用を早期に実現すべきである。

附属図書館の図書館資料の集中管理は、附属図書館（本館）の懸案事項である。旧山梨大学附属図書館では、図書館資料の集中管理ではなく、各研究室や書庫などへの分散

管理を認めてきた。そのため、図書館資料の散逸や重複購入が行われてきており、資料の有効活用には程遠い状態が続いている。甲府キャンパスの集中管理は現在、図書館資料の30%しか進んでいない。附属図書館の図書館として本来有すべき資料の収集・保存という基盤的機能が機能不全に陥っているといわざるをえない。資料の保存機能が十分機能していないために収集機能と提供機能が円滑に機能していないのである。こうした事態を深刻に受け止め、現在の遡及入力体制と計画を再検討し、一刻も早く図書館資料の集中管理を実現しなければならない。

(2) 電子図書館的機能：図書館資料の「占有から共同利用」への方針転換

図書館資料は、電子媒体のみならず、紙媒体も含めて「占有から共同利用」へ方針を転換すべきである。

電子図書館の機能は、利用者だけに帰属する占有型利用になじむものではなく、本来的に共同利用型のサービスである。電子ジャーナル経費の負担は、その意味で利用者や部局単位ではなく、附属図書館がその経費を負担することが合理的である。ただし、附属図書館が電子ジャーナル経費を負担することでサービスの安定的供給を維持することはできるが、他方では電子ジャーナルの価格が年々高騰していくことが予想されるので、その経費が膨張することが危惧される。電子ジャーナルの共通経費化によって安定的供給を維持するという基本方針を確認すると同時に、短・中期的な視点に立って電子図書館プログラムを早急に開発する必要がある。

甲府キャンパスにおいては、これまで冊子体の購入経費については、占有的利用を希望する教員が負担するという受益者負担の原則が成立していたが、近年の冊子体の価格高騰と法人化による研究費の削減によって、この原則自体を維持することが困難になってきた。こうした現状を打開するためには、甲府キャンパス（本館）においても冊子体の共同利用・共同購入へ道を開く方法を検討する必要がある。

(3) 教育支援機能：大学教育研究開発センターとの連携

附属図書館は、授業設計の支援、教育支援機能、情報リテラシー教育を強化し、教育課程と連携すべきである。

教員が「責任ある授業設計」を行う上で、教員と図書館が連携できる授業支援サービス(Course Reserve)を強化すべきである。授業で使用するシラバス用図書、参考文献、雑誌論文等を附属図書館が計画的に取り揃えることは言うまでもないが、講義録、試験問題、レポート課題などを提供できるサービス機能(Electronic Course Reserve 電子的授業支援サービス)を検討する必要がある。さらに、授業であらかじめ読んでくるように指示された文献を附属図書館が用意できる体制を整備する必要がある。これは本学の教育方法とも連動する課題であり、附属図書館と大学教育研究開発センターとの連携を視野に入れて検討すべき事項である。

学生用図書の購入経費については、一定の基準の下に確保し、学生用図書の計画的配備に努力する必要がある。また学生用図書の選定についても、教員個々による資料の選書と並んで大学教育研究開発センターと連携しつつ、学生用図書の選書方法を新たに確立すべきである。

各学部単位で実施されている情報教育関連の入門授業と図書館が連携する必要がある。

() 図書館情報リテラシー教育を支援する環境整備については、IT推進本部や総合情報処理センターと連携しつつ、全学的見地から進める必要がある。() 図書館の情報活用プログラムについては、情報関連担当の教員と連携しつつ、情報リテラシー教育のあり方、情報と倫理などに関して本学独自の情報リテラシー教育に関する方法論を確立すべきである。そしてその方法論を具体化したガイドブックの作成・刊行を目指し、将来的には附属図書館が共通教育の図書館情報リテラシー教育に関する授業科目を担当すべきである。

(4) 情報発信機能

附属図書館は情報収集機能のみならず、情報発信機能を強化すべきである。

紀要、博士論文等の電子的サービスの提供を検討する必要がある。これまでは著作権の問題から部局主導のサービスが中心であったが、印刷・頒布経費の問題を考えると、今後は全学的に電子化によるサービスに転換する必要がある。電子出版支援体制の構築や著作権処理について総合情報処理センターとの連携を視野に入れながら、全学的に検討する必要がある。

(5) コンサルティング機能

附属図書館は、レファレンス機能を担う人材を育成し、多様なコンサルティング機能を強化すべきである。

従来の文献検索などのレファレンス業務に加えて、電子ジャーナルやデータベースの利用方法などのレファレンスはいままで以上に必要になる。図書館資料の紙媒体から電子媒体への移行が急激に進展し、利用者の情報利用のための知識・ノウハウなどより専門的なナビゲーターが必要とされている。レファレンス機能をいっそう充実するために、この部門の人材を育成することが早急の課題である。

(6) 広報機能：開かれた図書館

図書館資料の蓄積は、地域社会に広く公開し、地域の文化振興に寄与すべきである。

図書館所蔵のコレクションは本学固有の知的財産であるばかりでなく、人類共通の財産である。附属図書館には、スピノザコレクションと近代文庫という哲学と国文学のコレクションがある。このコレクションを、展示等をつうじて地域社会に公開していくことは附属図書館の社会的責務である。また本学にはワイン、水晶等の本学独自の財産も

ある。こうした固有の財産に関連した文献を附属図書館が計画的に蒐集していくことも重要である。

(7) 滞在型図書館の創設

附属図書館は、自学自習のための多機能空間を提供し、滞在型の図書館作りを目指すべきである。

現代の学生のライフスタイルは多様化し、授業の受け方、研究の仕方もじつに多様化してきている。本学の学生を見ても大学滞在時間の短い学生が比較的多いという指摘もある。これは一面では、現代の学生気質に由来する側面もあるが、他面では大学内における自学自習施設の不足および学生の居場所としての空間の不足にも原因がある。附属図書館施設が学習支援・教育支援の施設としてその機能をいっそう高度化していくことはもちろんであるが、学生の居場所としての空間、学生相互のコミュニケーションの空間、文化交流空間を兼ね備えるような複合的な施設に変貌していく必要がある。

施設改善の基本構想

1 基本理念

- (1) 学生の知の創造活動を支援する多機能空間を創造すべきである。知の集積空間、情報の空間、創造的空間、癒しの空間、文化交流の空間を一定の有機的関連のもとに配置し、全体として学生の「広場」となるコンセプトを表現する建築物にすべきである。
- (2) 閲覧室、書庫、学習室等が区切られた空間としてだけでなく、フレキシブルに利用できる多機能空間を創造すべきである。
- (3) 大学のイメージを象徴するような建築物を作り、学生には思い出に残るモニュメントにすべきである。
- (4) 図書館職員には、図書館資料の効率的な管理運用ができる機能性を追求すべきである。

2 具体的な改善事項

(1) フロアプラン

[さらに充実すべき施設]

パソコンコーナー

従来型図書館と電子図書館の2つの機能を同時に利用できるような広い空間に機能性に富む机を配置し、50台以上設置する。専用の部屋でなくコーナーとして閲覧室と一体となった配置とするが、語学の自習にも利用できるように音が外部に漏れない

ブースを5ブース設置する。

グループ学習室

セミナーも可能な20人規模から少人数の4人程度まで多様な人数のグループが使用できるようにさまざまなサイズの部屋を10室以上設置する。内部の状況がわかるようにガラス張りにするとともに、大画面モニターつきのマルチメディア対応パソコンを設置する。

視聴覚資料閲覧スペース

ビデオテープ、CD、DVD等、多様な媒体を1台で視聴できるAV対応パソコンを20台以上設置する。部屋として区切らず、オープンなスペースとして配置する。

コピー室

騒音対策のため、独立した室とする。

書庫および閲覧室

全面開架方式でバリアフリーの60万冊収納可能な図書書架、雑誌のバックナンバー40万冊を収納可能となる書庫、500席以上を要する閲覧室を配置する。

[新たに補充すべき施設]

広いエントランス

モニュメンタルな施設とするため、印象に残るスペースとする。

リフレッシュルーム

新聞、教養雑誌等が閲覧できるとともにリラックスできる雰囲気のある室とする。

スタディールーム

図書館資料を大量に使用して長時間にわたって、研究・学習をする利用者のために、スタディールームを10室配置する。

ワーキングスタジオ

データの加工・バックアップ・編集ができるスタジオを設置する。

多目的ホール

講義、ガイダンス、講演会、演奏会、学生のプレゼンの場等に利用可能な100人規模の室とする。

レファレンスルーム

サービスカウンターに隣接して、少人数の情報リテラシー教育も可能な室とする。

常設展示室

近代文庫、スピノザコレクション等を展示するほか、毎年の企画展等に対応する。

貴重書室

貴重なコレクションの劣化を防ぐため、内装が木製の恒温・恒湿の室とする。

(2) 館内空間

全体に、透明性・開放感を基調とした明るい空間とする。

利用者の安全確保には充分配慮する。

窓部分は、外の自然に融け込むような空間とする。

館内は、バリアフリー対応とする。

館内は、各部屋を固定せず融通性をもった空間とし、フレキシブルな利用形態を可能とする。

什器類は、色・デザインに配慮した一定の共通性を持ち合わせながら画一的にならず、それぞれの空間において個性をもたせるようにする。

利用者（特に留学生）にわかりやすいサインを設置する。

24時間開館に対応して、利用目的に沿った空間のゾーン分けをする。

(3) インテリジェント機能

館内すべての場所で高速な無線LANを利用可能とする。

すべての閲覧席で情報機器を利用可能とするための電源を用意する。

各室の入退室を身分証明用磁気カード、ICカードで管理することにより、24時間利用可能とする。

貴重書の電子化、WEBによるレファレンス相談など、電子図書館機能を拡充する。

省力化のため、監視カメラ等の電子機器を多用した管理体制を構築する。

付 属 資 料

「附属図書館の将来設計」策定までの経緯

1. 「附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト」の設立（5月27日）

平成16年度第1回附属図書館運営委員会において「附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト」設立を決定した。

2. 第1回プロジェクト会議（6月16日）

館長からプロジェクト会議の趣旨説明を行った。

3. 第2回プロジェクト会議（7月26日）

植松、岸本、久保田の各委員から以下の報告があった。

- (1) 大学図書館を取り巻く環境の変化と対応の方向性（植松委員）
- (2) 山梨大学附属図書館の将来を考えるにあたって（岸本委員）
- (3) 新図書館のあり方（久保田委員）

4. 第3回プロジェクト会議（10月27日）

梅本、熊田の各委員から以下の報告があった。

- (1) 横浜国立大学図書館改修をめぐって（梅本委員）
- (2) 新しい図書館像についての私見（熊田委員）

5. 第4回プロジェクト会議（12月1日）

教育人間科学部、医学部、工学部の各学部の学生協力委員から以下の報告があった。

- (1) 山梨大学附属図書館の将来像について（渡辺学生協力委員）
- (2) 学生の立場からの図書館（赤根学生協力委員）
- (3) 図書館の将来像（村松学生協力委員）

続いて、附属図書館職員から他大学図書館の視察結果について以下の報告があった。

- (1) 横浜国立大学附属図書館（7月8日）
- (2) 国際基督教大学図書館（10月14日）
- (3) 広島女学院大学図書館（11月4日）
- (4) 広島修道大学図書館（11月4日）

6. 第5回プロジェクト会議（2月1日）

前4回の報告を踏まえ、館長から提示された「附属図書館の増築・改修の基本コンセプト（試案）」をもとに検討を実施し、この案が原則的に了承された。

「附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト」

研究分担者個別報告要旨

(以下、発表順に掲載。敬称略)

1 「大学図書館を取り巻く環境の変化と対応の方向性」

植松 貞夫

- ・コアになる雑誌(約3,000種)を図書館が購入している。最新号のみが各講座にいくが、すべての雑誌(約24,000種)を図書館が管理している。
- ・図書の教員への特別貸出は、100冊が限度である。東京教育大学から筑波大学に切り替わるさい、特別貸出の制度を設けた。通常の貸出は、教員も学生も3週間である。
- ・筑波大学の図書館の職員数は、館長以下79名、ボランティア登録が48名である。ボランティアがいないと、サービスが100だというのは駄目である。ボランティアがいるとサービスが120になるという意識をもつ必要がある。ボランティア活動は、図書の並べ替え等の単純作業ではなく、自己実現できる環境が必要である。
- ・図書館をめぐる基本的な問題として、1.電子図書館と従来型図書館とのバランス、2.快適な利用環境、3.メディア利用の場としての環境構築、4.図書館員の専門的意識の向上、5.レファレンス能力の向上が重要である。

(平成16年7月26日第2回会議で報告)

2 「山梨大学附属図書館の将来を考えるにあたって」

岸本 広司

- ・ハイブリッド・ライブラリー(従来型と未来型との融合)をいかに作っていくか。
- ・県立図書館との差別化をどのように図っていくべきか。宝飾関係、ワイン醸造関係の資料の収集をすべきである。
- ・資料の劣化、寄贈図書を増やしていくことを検討したほうがよい。
- ・博物館との関係も考慮してよい。「水晶」などの山梨大学の資産を活かすべきである。
- ・ボランティアの活用。
- ・知の館としての図書館を構築すべきである。図書館のもつ意味は、図書資料そのものの質感であり、また建築物としての図書館である。

(平成16年7月26日第2回会議で報告)

3 「新図書館のあり方」

久保田 健夫

- ・ 電子的機能と紙媒体とのバランスをどう図るのか。雑誌が講座に分散されているのは、経費した限りでは、日本だけのことである。
- ・ 図書館資料の集中管理は、一見無謀だが、日頃より図書館に雑誌がないと嘆いている利用者には賛同が得られるのではないか。
- ・ 電子的図書館機能（電子ジャーナル）を充実させることによって、施設改善費を必要最小限に抑えることができる。
- ・ 定員削減のあおりで図書館職員の数も例外なく減らされている現状のなかで、なおさら人（図書館員）の重要性、意義を考えなければならない。

（平成 16 年 7 月 26 日第 2 回会議で報告）

4 「横浜国立大学図書館改修をめぐって」

梅本 洋一

- ・ 横浜国立附属図書館改修に関わる、その出発点から完成、完成後の問題点に至る一連の事業についての報告があった。
- ・ 法人化後の大学にとって、図書館の存在はいままで以上に重要なものになっていくのではなか。
- ・ 地域貢献の場（交流の場）としての図書館がある。
- ・ 世界中の人が見に来るような図書館、広く世界に発信できるような図書館、山梨大学型の冒険をしてみたらどうか。
- ・ 反面、学生にとっての図書館をどう考えるのか。
- ・ いまの問題を解決することは簡単だろうが、10 年、20 年後の図書館像を考えて計画することが大事ではないか。
- ・ ここの図書館でしかない資料、唯一山梨にしかない資料を、この山梨大学から世界に向けて発信する。収集するばかりでなく、そこから発信することが大事である。
- ・ 古いものを壊して立て直すことも方法であろうが、いまあるものを使ってそれを活かしながら新しいものを作り出すことも方法のひとつであろう。

（平成 16 年 10 月 27 日第 3 回会議で報告）

5 「新しい図書館像についての私見」

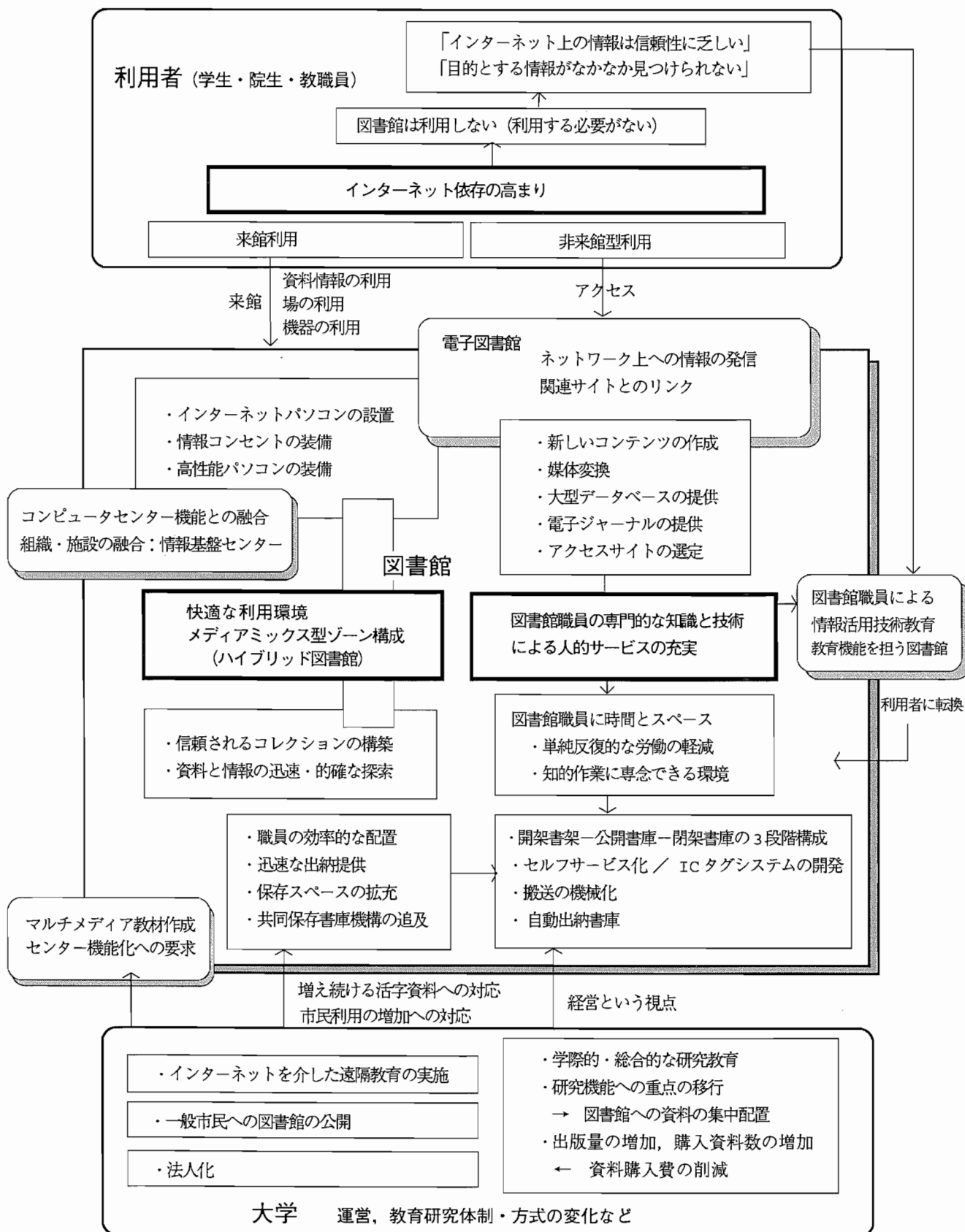
熊田 伸弘

- ・ オスロ大学、オレゴン州立大学、ペンシルバニア州立大学における図書館のスペシャルコレクション等の紹介。秋田大学附属鉱山博物館の紹介。
- ・ 教養図書室を含む複合施設についての提案。
- ・ 対外的な情報発信施設。
- ・ ワイン、宝石関係等山梨大学での研究成果の資料を集める。
- ・ 学習図書室を設け、教員室を隣接させる。
- ・ イベントができるようなホールを併せ持つ。
- ・ 図書館として予算化されるのは難しいと思われるので、複合施設として要求する。
- ・ 情報発信もできるような大学のシンボリックな建物としたい。学習向けの図書館と研究者向けの図書館機能を分けた建物とする。
- ・ 図書館のことをすべてがわかる教員がいない。そういう教員を採用することが大事ではないか。
- ・ 電子ジャーナルの共通経費化、経費の根拠を示し、電子ジャーナルの使用料を広く教員が負担する。

(平成 16 年 10 月 27 日第 3 回会議で報告)

大学図書館を取り巻く環境の変化と対応の方向性

筑波大学附属図書館長 植松貞夫



山梨大学附属図書館の将来を考えるにあたって

岸本 広司 (教育人間科学部) 2004 . 7 . 26

はじめに

電子情報化と「印刷媒体資料・大学図書館不要論」

- 1 図書館における電子情報化
- 2 電子情報化のメリット
 - (1) 貴重資料の保存と有効活用が可能
 - (2) 資料保存スペースの大幅な節約
 - (3) 利用が便利
 - (4) 新しい「読書」形態やサービスが可能
 - (5) 図書館業務の合理化と再編
- 3 電子情報化への取り組みとその重要性
- 4 「印刷媒体資料・大学図書館不要論」について

図書と図書館

- 1 図書の持つ意味
 - (1) 図書の持つ独自性
 - (2) 機能書と文学書
 - (3) 「作品」としての図書
 - (4) 図書を見るということ、触れるということ
- 2 図書館の持つ意味
 - (1) 書斎としての図書館
 - (2) 知の館としての図書館

山梨大学附属図書館の現状と課題

- 1 蔵書数と利用者から見た実数について
 - (1) 約 55.5 万冊の蔵書数
 - (2) 実際に利用可能な冊数
 - (3) 封研究・教育上の不便さ
- 2 閉架式の問題
- 3 資料の分散化の問題
 - (1) 最大の問題としての資料の分散化
 - (2) 集中化に 50 年遅れた山梨大学
 - (3) 資料はあるのに、実際には無いに等しい状態
- 4 緊急課題としての資料の集中化

おわりに 新図書館の建設を目指して

新図書館のあり方

山梨大学大学院環境遺伝医学講座 久保田 健夫

1. まじめな学生のための図書館

これまで利用した図書館の好印象の要因は、静寂に満ちていることであった。これは教員としてだけではなく学生のときからそう思った。したがって図書館はある程度厳しい規律の下、まじめな学生の勉学能力をはぐくむ場所であってほしい。多くの学生の憩いの場である必要はない。喫茶店にいけばよい。真面目な学生のために、うるさい飲み物持参の学生は、見せしめの意味も含めて、つまみ出すぐらいであってよい。

2. 図書館員の充実

昨今の職員定員削減のおおりで、図書館員の数も減らされていると聞く。図書館の利用者サービスを充実させるためには、一定人数の確保が必要である。非常勤やボランティアを採用し、静寂を保つために巡回をすることが必要である。

3. 雑誌の集中化

雑誌が講座に分散しているのは経験した限り日本だけのことである。図書を講座の校費で購入するシステムがその元凶であったと思われる。そこでシステムを改め、各講座の校費の一部（図書購入分として5 - 10 万円）を一律削減し、それを図書館の図書購入分にまわす。ついで各講座から希望の図書や希望の雑誌を募って図書館で購入する。しかしそれらの書物を講座に置くようなことはせずすべて図書館からの貸し出しとする。このシステムは一件無謀だが、日頃より図書館に雑誌がないと嘆いている多くの講座構成員の賛成が得られると思われる。

4. インターネットサービスの充実

図書の紛失や貸し出し中のため読めない、発刊時に外国の最新情報が入手できる、図書館に行く必要がなく各講座でダウンロードできる、保管庫の建設費用が軽減できる、などインターネット購読には多くの利点がある。施設改築費を最小限に抑え、その分を電子ジャーナル契約にまわすことが将来の山梨大学のためと考える。しゃれた建物ではなく、中身（人も含む）と研究業績で勝負したい。

以上、勝手な意見をお許しください。

横浜国立大学図書館改修をめぐって

1. その出発点（1999年9月）

- 1) 蔵書数の大幅な増加 　　とりあえず大きくすることか？
- 2) 2分割された建物の不便さ 　　もっぱら事務の問題か？
- 3) 耐震の問題

2. トータルデザイン（学長裁量経費）（2000年3月）

- 1) 図書館というコンセプトの再検討 　　多様な対立
- 2) 知の蝶番というコンセプト
- 3) ビブリオテークからメディアテークへ（文字から視聴覚へ） 　　何を収集する
のか？
- 4) 収集から発信へ（メディアホール、ワーキングスタジオ）
- 5) 多様な出会いの場の創造（カフェ、情報ラウンジ）
- 6) 北山研究室の学生の協力 　　多様な図書館像
- 7) （陳情）

3. 基本計画の策定（2000年8月）

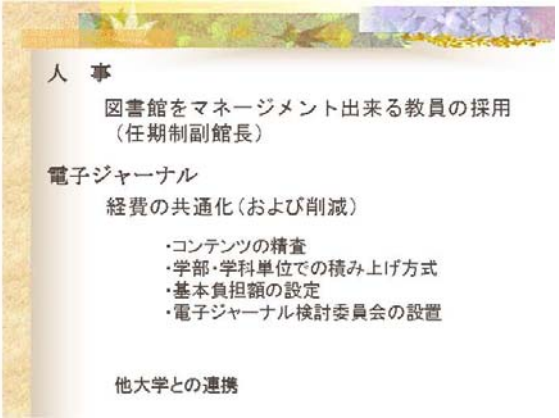
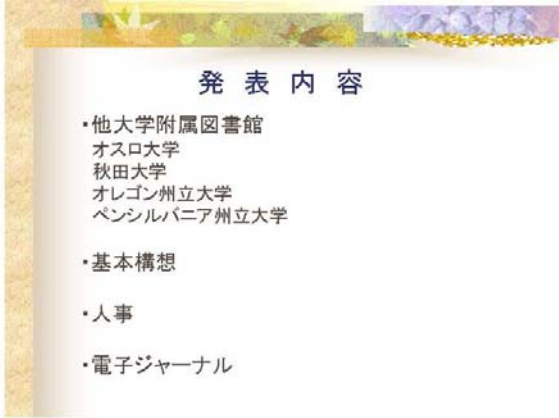
- 1) 基本設計（飯田善彦氏） 　　基本設計と基本計画は異なる
- 2) 基本計画の策定の問題点 　　旧弊との闘い
- 3) 施設部と実施設計 - ある種の失望 　　（名古屋大学）
- 4) 工事中の問題 - どこに置くのか？

4. 完成以後の問題点 　　似て非なるもの？（2003年4月）

- 1) メディアホールの施設 　　箱だけ？
- 2) 情報ラウンジの施設 　　継続性
- 3) 図書館事務方の人事
- 4) 企画の問題 　　大学全体の問題

5. これからの大学付属図書館

- 1) 法人化後の大学の中での図書館
- 2) 多様なニーズの中で
- 3) グローバル化の中での図書館



山梨大学附属図書館の将来像について

2004 . 12 . 1

図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト会議発表資料
教育人間科学部 発達教育コース 2年 渡辺 克吉

1 . 現在の図書館の利用状況について

附属図書館の主な利用状況として、レポート課題の作成のためやテスト期間中のテスト勉強のために利用する学生が非常に多い。

それ以外にはあまり利用する機会が無いという現状がある。

2 . 附属図書館の課題と改善点

(1) 課題について

- ・附属図書館の課題として、学生にとってより使いやすい図書館を目指していくことが第一に挙げられる。
- ・レポート課題やテスト勉強のための利用のみではなく、日常生活においても学生の「居場所」としての図書館作りをしていく事が理想的である。

(2) 改善点について

- ・開館時間が短い。
午後 8 時では学生のライフスタイルに合わない。開館時間の延長を希望する。
- ・図書の検索の仕方が分かりにくい。入手したい本が入手しづらい。
附属図書館内に配架されている図書は少なく、研究室や学科の書庫に散らばっているという現状を改善することが必要。
- ・個人席が少なく、テスト期間などは使えない事がある。
1 つの机に 3 つ椅子があるが、知らない学生の隣には座りづらいので、衝立を作る等の工夫がほしい。
- ・全体的に騒がしい。
個人机とグループ学習室は逆にした方がよいのではないか。
本が全体的に古めで、新しいものが少ない。
教育の図書に関して言えば、古い資料が多く扱いづらい。
- ・パソコンの台数の増加とプリンターの設置を。
プリンターが無いというのは非常に不便である。パソコンを使用して、すぐにプリントアウトができる環境があれば非常に良い。

3. 山梨大学附属図書館への要望

- ・今回は、私が所属する発達教育コースの1年次生から4年次生までに附属図書館に対する要望をアンケート調査した。その結果を以下に示したい。

『アンケートで出された要望』

- ・24時間体制にしてほしい
- ・教育関係の図書を増やしてほしい（特に新しい本が少ないように感じる）
- ・入り口の検査をやめて地域に開放するべきである
- ・ジュース類を持ち込める学習スペースの確保（勉強において飲み物の存在は予想以上に大きい）
- ・小説や雑誌（音楽の友やNEWTON）など一般向けの図書があればいい
- ・カフェテラスのようなリラックスできるようなスペースがあればいい。

4. まとめ

- ・以上のようなことを踏まえて考えると、図書館は「学生の生活の中心となる場所として利用できるようになること」が理想ではないかと感じる。学生自らが利用したいと思えるような、内発的な動機に基づいた利用が出来るような環境作りをしていくことが、求められているのではないだろうか。

学生の立場からの図書館(医学分館)

2004 . 12 . 1

図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト会議発表資料
山梨大学医学部医学科 2年 赤根 真央

1 . 図書館利用の目的

・文献の参照

効率よく学習を進めていくには、文献の検索が自由にでき、その結果を参照できることが必要である。そのためには、図書資料やデータベースの充実、及び、相互利用サービスが必要となっている。

・勉強の場

図書館は、落ち着いて学習に集中できる居場所としての機能を持つことが求められている。

2 . 施設等の課題

・座席数が少ない(特に個人席)

全体の床面積も少ないが、利用者(特に学生数)に対する座席数が不足している。落ち着いて学習するためには、個人席の増設が必要である。

・電気が点いたり消えたりする

照明器具の点検を日常的にする必要がある。

・空調がよくない(夏は暑く、冬は寒い)

空調機の老朽化の影響か、調節が上手くいかないようだ。早急に改善の必要がある。

・図書が少なく、古い

図書館の根本的な機能である図書資料が少なく、且っ古いものが多い。医学部で学ぶ者は常に最先端を見つめることが求められるので、新刊書を多く取り揃えることが必要である。

3 . 良い点

・時間外特別利用

医学部1年次生から閉館後の時間帯においても申請により、図書館を利用できることは、大変ありがたいことである。

・検索機能が充実している

医学図書館には欠かすことができない医学中央雑誌やMEDLINEなどが自由に利用でき、学習を進める上で大いに活用できる。

- ・特別利用時も使用可能な学習室

閉館後の時間帯においても、申請により学習室の利用が可能である。昼の時間帯などはあまり利用できない場合でも、この措置により有効な活用ができる。

4 . 希望すること

- ・休憩する場所

学習していて疲れたときにちょっと休憩できるスペースの設置を希望する。

- ・特別利用時の貸し出し

閉館後の時間帯の特別利用時であっても、借りたい資料が出てくるため、特別利用時の貸し出しサービスをお願いしたい。

- ・じゅうたんの床

じゅうたんの床は靴音などの対策には良いが、一方、ほこりやハウスダストなどが気になるところである。衛生面にも十分な配慮をお願いしたい。

図書館の将来像

工学部コンピュータメディア工学科
T02KG038 松村 健次

1 現在の図書館の抱える課題・問題

休憩所の不足

- ・基本的に飲食が不可能である。飲食できる場所の提供、カフェがあれば理想的。
- ・ほとんどの人は何時間かに一回は休息する。こういったときに飲食したくなるのはごく当たり前のことである。

視聴覚資料の有効利用

- ・現在の視聴覚室
利用されているかどうか疑問、使い辛そう、資料選定に対する疑問、視聴覚室をなくして自由利用端末を増やしたほうが.....。
- ・ミニシアターの導入（理想）
それが不可能でももう少し状況の改良を。北星学園大学 プラズマテレビ

建築設計上の問題点

- ・防音対策への対応不足
理想を言えば個室。最低でも仕切りはあるべき 塾の自習室程度
他大学 人数制限、時間制限付のグループ学習室
- ・書架の閲覧がし辛い、よく読まれる、借りられるものは目につきやすいところに（本屋と同じ原理）、上記の目標を実現するために、利用状況のデータベースを作成、場所の節約

蔵書の所在

- ・検索システムのインターフェースの問題、システム設計の評価に一般利用者の意見を採用
- ・教授の蔵書の私物化問題、研究室にある蔵書の一般開放
- ・書庫をもっと活用しやすいよう工夫

2 将来的展望

- ・図書館のコンセプトをしっかりと持つ、開かれた図書館
- ・「気持ちよく利用してもらえる環境」の提供
- ・目を見張るような工夫
- ・積極的なプレゼンテーション、内外への広報戦略

新築・増築館視察報告

視察館

横浜国立大学附属図書館

国際基督教大学図書館

(ミルドレッド・トップ・オスマー図書館)

広島女学院大学図書館

広島修道大学図書館

2004・12・1

附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト会議発表資料

情報サービスグループ 北原 夕里歌
医学情報グループ 富士 美恵子

横浜国立大学附属図書館 開館 2003 年 4 月 見学日 2004 年 7 月 8 日(木)

1. 図書館の概要

(1) 施設(増改築)

地下1階 地上4階 延床面積: 12,231 m²(既設面積 7,450 m²+増築面積 4,781 m²)

収容可能冊数: 88万5,175冊(中央館のみ。全体 135万2,000冊)

蔵書冊数: 約 124万1,000冊

閲覧席: 1,116席 パソコン: 85台

奉仕対象数: 12,959人(学生: 11,058人)

学部数: 4学部(教育人間科学部、経済学部、経営学部、工学部)

(2) フロア構成

1階: メディアブース、メディアホール、情報ラウンジ、カフェ、書庫

2階: カウンター、事務室、参考図書、PCプラザ、リフレッシュルーム 等

3階: 図書閲覧フロア、雑誌閲覧フロア、AVエリア、ワーキングスタジオ 等

4階: 雑誌閲覧フロア

2. 図書館の特徴

(1) コンセプト

多機能文化空間

快適で使いやすいアメニティー空間

国際情報・交流空間

紙資料と電子情報が共存するメディアミックス空間

(2) 施設の特徴

PCプラザ、AVエリア、メディアブース、情報ラウンジ、メディアホール

PCプラザ: パソコン 50台。総合情報処理センターと繋がっている。

メディアブース: 2階の入館ゲートを通らずに利用可能。

カフェ: 軽食が可能

情報ラウンジ: 普段は椅子と机として置かれているが、展示机にもなる。

メディアホール: 前にスクリーンがある。席の間が広く、机を置くこともできる。

ワーキングスタジオ: 様々な電子情報の加工、情報発信が出来る。

閲覧スペース、リフレッシュルーム

閲覧スペース: 机や椅子は利用者の様々なニーズに応えられるよう、椅子のキャスターの有無から始まって色、形態、設置場所などの種類を変えて豊富に用意されている。照明が多く、スペースも広い。

リフレッシュルーム: 飲食や携帯電話の利用などを全て制限するのではなく、1階のカフェ、2階のリフレッシュルーム、携帯電話利用スペースなどを設け、場所を分けて可能にしている。

全体

1階が動的スペース、階が上がるに従って静的なスペースになっている。

極力壁や仕切を無くし、仕切が必要な場所はガラスにするなどして出来るだけ広々とした空間になるように工夫されている。

北側が全面ガラス張りである、仕切りが少ない、照明が多いなどの工夫により図書館の中が常に明るい状態である。

利用者の要望を多く取り入れた、滞在型の図書館である。

3. 開館後の状況等

入館者数の増加(開館後1ヶ月で1万5千人増)

カフェは人が集まる場所となっていて、授業以外は図書館にいるという利用者も増えた。

様々な学習スタイルによって使う場所を住み分けできるようにしたため、閲覧スペースなどは静かである。

国際基督教大学図書館(ミルドレッド・トップ・オスマー図書館)

開館 2000 年 9 月 見学日 10 月 14 日(木)

1. 図書館の概要

(1) 施設

地下 2 階 地上 3 階 (新館) 延床面積 (新館) : 3,874 m² (本館約 4,500 m²)
収容可能冊数 : 80 万冊 (本館 30 万冊 + 新館 50 万冊)
蔵書冊数 : 61 万 1,000 冊
閲覧席 : 186 席 (本館との合計 601 席) パソコン : 50 台
奉仕対象数 : 3,678 人 (学生 : 3,050 人)
学部数 : 1 学部 (教養学部)
フロア構成 (新築部分)
地下 1、2 階 : 自動化書庫
地階 : スタディ・エリア、AV キャレル、マルチメディアセンター、インフォメーション & サービス (自動化書庫からの図書取り出し)、事務室
1 階 : スタディ・エリア、グループ学習室、レファレンスサービスセンター、展示スペース等。

2. 図書館の特徴

(1) コンセプト

書庫を建設し、上限 80 万冊の図書を保存する。
媒体にかかわらず学習研究に必要な資料を提供し、統合して使える図書館とする。
情報技術を積極的に導入し、省力化を図り図書館員が専門性を発揮できる図書館とする。
図書館がコミュニケーションの場となり、学習やコミュニケーションを通して人と人との交流の場となるようにする。

(2) 施設の特徴

自動化書庫 : 新館部分は、自動化書庫以外には図書は無い。自動化書庫は 50 万冊収納可能で、本は地階のカウンターで受け取る。
スタディ・エリア : 主にパソコンが置かれている。机はノート等が置けるような広い物で、様々な形に組み合わせることが可能な形のものを選んでいく。また、空間を広く取ることによって雰囲気大切に、居心地の良い場として定着させるようにしている。
マルチメディアセンター : ノートパソコンを約 50 席で使用できる。
グループ学習室 : 机は部屋ごとに変えて、用途に合わせて使えるようになっている。
レファレンスサービスセンター : レファレンス専門の部屋を作ることによってサービスの強化を図っている。(しかし、書架のある本館と離れているため、参考図書は離れた場所にある。)
全体
将来、必要なサービスが変わっても対応できるように、用途が限られる家具等は使わず、スペースもあまり区切らないといったフレキシブルな状態になっている。

3. 開館後の状況等

図書の貸し出しが 20% 増した。
スタディ・エリアの利用が増え、入館者も増加。(全学生の約半数が 1 日に来館。)
レファレンスルームをスタディ・エリアの横に設置したことによってパソコンの質問なども増えたが、それらにも全て対応することによって利用者にとってレファレンスサービスが身近なものになった。
開館後の利用状況やその後のサービスの変化で、当初予定していたことと違う目的で使っている場所などもある。(例 : レファレンスサービスセンター)

広島女学院大学図書館 開館 2004 年 10 月 見学日 2004 年 11 月 4 日(木)

1. 図書館の概要

(1) 施設(新築)

地下1階 地上4階 延床面積:5,913 m²
収容可能冊数:40万冊
蔵書冊数:18万7000冊
閲覧席:596席 パソコン:24台(貸出ノートパソコン10台)
奉仕対象数:85,299人(学生:1,978人)
学部数:2学部(文学部、生活科学部)

(2) フロア構成

地下1階:製本雑誌
1階:総合カウンター、参考図書、雑誌、新聞、視聴覚室、展示コーナー、自由PCコーナー、事務室等
2階:一般図書、指定図書、研究個室、バルコニー等
3階:一般図書、グループ演習室等
4階:一般図書、グループ演習室、プレゼンテーションルーム等

2. 図書館の特徴

(1) コンセプト

Community-spirited
IT-Sophisticated
User-friendly
Ecologically-minded

(2) 施設の特徴

展示コーナー、展示スペース:入館ゲートの前に設置。展示スペースは普段はフリースペースで場合に応じてパーティションで自由に区切って使うことができる。
自由PCコーナー:24台のパソコンがある。
プレゼンテーションルーム
新聞閲覧室、地図コーナー:女性の力でも使いやすく引き出せる棚を使用。
書架:車椅子でもすれ違い可能な広さ。
閲覧スペース:OPAC用の椅子が気軽に座りやすいものである、机の下に必ず荷物を置く場所または荷物をかけるフックがあるなど、細かい点で気を配っている。
グループ学習室:パーティションで区切られているだけなので、場合に応じて広げることが可能。
研究個室:一人用の学習スペース。
バルコニー:景色を眺めながら休憩、雑談ができる。
全体
利用者の動線を考えてわかりやすい配置になっている。
窓が多く非常に明るく、仕切りも柔らかな色調、形のもので、光を遮らないものが使われている。
1階が動的スペース、2階から静的スペースになっている。
職員の目の届かない場所には集音マイクがあり、大きな音がするとわかるようになっていたり、レファレンス用のテレビ電話があるなど、少ない職員でも対応できるような工夫がされている。
事前に新図書館に向けてアンケートをとっている。

3. 開館後の状況等

10月開館のため具体的な数値は出ていないが、貸出・入館者数が増加。
(入館者数は10月だけで4~8月の倍)
本が新しく見えると言われる。

広島修道大学図書館 開館 2003 年 3 月 見学日 2004 年 11 月 4 日(木)

1. 図書館の概要

(1) 施設

地上 4 階 延床面積：11,771 m²(増築部分 7,324 m² + 既存部分 4,447 m²)

収容可能冊数：約 120 万冊

蔵書冊数：626,000 冊

閲覧席：1,024 席 パソコン：ノートパソコン貸出

奉仕対象数：6,821 人(学生：6,270 人)

学部数：5 学部(商学部、人文学部、法学部、経済科学部、人間環境学部)

(2) フロア構成

1 階：書庫

M 2 階：エントランスホール、展示ギャラリー、自由閲覧室、ライブラリーホール、コーヒーラウンジ等

2 階：総合カウンター、新着雑誌、新聞、A V、リスニングコーナー 等

3 階：一般書架、閲覧室、グループ学習室、研究個室、畳コーナー、屋上庭園 等

2. 図書館の特徴

(1) コンセプト

キャンパスの中心であること

学生、研究者にとって魅力があること

経済的で使いやすい新旧一体化

環境に配慮した施設づくり

(2) 施設の特徴

コーヒーラウンジ

ライブラリーホール：120 インチのスクリーン、ノートパソコン 30 台、100 人収容可能

自由閲覧室：図書館閉館時も利用できる。(図書館は月 1 日閉館するのみ)

リスニングチェア：景色を眺めながらリクライニングチェアにすわり音楽が聴ける。

書架：書架の間は広い。全て木の書架を使用しているため温かみがある。図書はほぼワンフロアに 15 万冊が開架。

閲覧スペース：机と椅子は全てデザインが統一されており座席数も多い。種類も用途に合わせて豊富。

グループ学習室：パーテーションで区切られているので広げることが出来る。

研究個室：パソコンが設置されている。

ソーラーシステム：屋上庭園に設置。

全体

階が上がるにつれて静的なスペースになるように、話をしながら学習する学生のための場所がある。

3. 開館後の状況等

大学の立地もあり、学生の大学での滞在時間が短いことが大学全体の課題であったが、図書館が新しくなり快適な滞在型の図書館になったことにより、学生の図書館の(大学の)滞在時間が長くなった。

「附属図書館の将来設計に関する調査研究プロジェクト」

研究分担者名簿（五十音順）

委員

植松 貞夫	筑波大学附属図書館長
梅本 洋一	横浜国立大学教育人間科学部教授
大友 敏明	山梨大学附属図書館長
大野 透	山梨大学学務部図書課長
大山 建司	山梨大学附属図書館医学分館長
岸本 広司	山梨大学教育人間科学部教授
黒澤 幸昭	山梨大学理事（教学担当）
久保田 健夫	山梨大学医学部教授
熊田 伸弘	山梨大学工学部教授
田丸 憲二	山梨大学理事(総務・財務担当)(平成 16 年 5 月～ 9 月)
塚原 重雄	山梨大学理事(財務・医療担当)(平成 16 年 10 月～ 3 月)

学生協力委員

渡辺 克好	教育人間科学部発達教育コース 2 年
赤根 真央	医学部医学科 2 年
松村 健次	工学部コンピュータメディア工学科 3 年

図書館職員

北原 夕里歌	情報サービスグループ
富士 美江子	医学情報グループ